

第35回 能楽若手研究会 大阪公演 於 大槻能楽堂

令和9年1月16日（土）
午後1時始め 開場正午

観世流 能

里の女
三輪明神

山本 麗晃

三輪

玄賓僧都

喜多 雅人

大鼓

守家

由訓

太鼓

中田

一葉

小鼓

成田

奏

笛

貞光

智宣

所の者

善竹 隆司

後見

上野

雄介

地謡

梅若雄一郎

齊藤

信輔

山本

章弘

上田

顕崇

寺澤

幸祐

笠田

祐樹

今村

哲朗

大和国（今の奈良県）、三輪山の麓で静かに暮らす僧・玄賓（げんびん）。その庵には、仏に供える花や水を届けに、毎日一人の女が訪れていた。秋も深まったある日、女は夜の寒さをしのぐため、衣を一枚分けてほしいと願い出る。玄賓から衣を受け取ると、住まいは杉を目印に尋ねてほしいと告げ、姿を消してしまう。やがて玄賓が三輪の社へ向かうと、御神木の杉には、先ほど女に与えた衣が掛かっていた。

一枚の衣をきつかけに、人と神との出会いが描かれる物語です。

女の正体は三輪明神。神でありながら人と同じように苦しみを抱え、僧に救いを求める姿には、神と仏を結びつけて信仰した当時の人々の思いが表れています。

後半では、三輪に伝わる神と人との婚姻の物語から、天の岩戸の神話へと世界が広がり、神楽が舞われます。

里の女として現れた神が、やがて神話の世界を舞台に映し出す。その変化と、秋の夜に繰り広げられる神秘的な舞を、是非楽しんで頂ければと思います。

山本麗晃

大蔵流 狂言

昆布売

大名

小西

玲央

昆布売

善竹

忠亮

後見

上吉川

徹

喜多流 独鼓

高林

昌司

横山奈帆子

商人が大名に対して優位に立つという、立場の逆転が下廻上の世相を反映している物語です。また、中世に流行した歌謡が盛り込まれており、当時の商法や市場の情景が窺える曲目となっており。

あわや命の危機になった大名は最終的にどうなってしまうのか、最後まで是非楽しんで頂ければと思います。

小西玲央

休憩十分

邯鄲

観世流 能

僧
熊坂長範

上野 朝彦

熊坂

旅僧

矢野 昌平

大鼓

山本

寿弥

太鼓

中田

弘美

小鼓

久田

杏海

笛

赤井

要佑

所の者

善竹 隆平

後見

今村

哲朗

地謡

稲本

幹汰

上野

雄介

上田

貴弘

上田

嶺貴

山田

薫

梅若雄一郎

笠田

祐樹

附祝言

【午後4時半頃 終了予定】

上野朝彦

観世流 能 「熊坂」

東国へ向かう旅の僧（ワキ）が途中、美濃国赤坂宿にやってくると、一人の僧（シテ）に呼び止められます。

今日はある人の命日なので弔って欲しいと頼まれ庵室に招かれますが、そこには本来あるはずの仏像や絵画が無く、代わりに大量の武器が並べられていました。

不思議に思った旅の僧が尋ねると、この辺りには山賊や夜盗が出て人を襲うため、土地の人々を助けるために備えていると説明します。夜も更け、僧が寝室に入っていくかと思っていると僧の姿は無く庵室も消え失せてしまいます。

（中入）

土地の者（アイ）にかつてこの地に大盗賊・熊坂長範がいた事を教えられ、旅の僧は先程の僧こそ長範の霊だと気付きます。

明け方近く弔っていると、薙刀を構えた長範の霊が現れ生前の物語を語り始めます。

大商人・三条吉次の一行を屈強な盗賊らと襲撃した所、牛若丸によって返り討ちに遭った様子を見せつけます。最期は一騎討ちの末命尽きた事を語り、弔いを乞い消えていくのでした。